

はじめに

本書は、社会福祉士養成課程において使用するテキスト・シリーズの一冊である。そのため、社会福祉士養成において必要とされるカリキュラムに沿って編集されている。一方で、各項目の具体的な内容は、各巻の編著者や執筆者にまかされている。そこで、本書では50の項目を決める際、社会福祉士養成課程のカリキュラムを網羅しつつ、「ルッキズム」「感動ポルノ」「ギフテッド」「知的障害のある LGBTQ+ の人」といった、社会福祉士養成課程のテキストでは目新しい項目やコラムも積極的に採用した。読者には、障害者福祉の基本的な事項を理解しつつ、そこにとどまらないソーシャルワーカー、あるいは社会福祉学習者としての知識や考え方の広がり期待している。これらの目新しい項目を学ぶ意義も含めて、本書「おわりに」もぜひ参照してほしい。

本書の読者には編著者として一つお願いしたい点がある。それは、人の多様性の一つとしての「障害」の理解である。私自身、「人の多様性とは？」と聞かれると、その答えに窮する。おそらく、具体的でかつ網羅的な回答が難しいからだと思われる。たとえば、年齢、性別、人種、SOGI（性自認・性的指向）、また、それらに加えて、価値観、宗教、学歴、言語、嗜好等を列挙することはできる。ただ、それらは人が持つ多様性のほんの一部でしかない。そして、そういった特性の一つに「障害」がある。

そのため、障害のある人は「特別」であり、「特別」ではないといえる。特別という言葉は、「他との間に、はっきりした区別があること」を意味している。⁽¹⁾ 障害という視点でみれば、その人は「特別」かもしれない。ただ、障害以外の多様性でみれば、その人は特別ではないかもしれない。そもそも、障害の有無に関係なく、人には個性がある。それゆえに、AさんはAさんとして、そして、BさんはBさんとして同定できる。その意味では、人はみな、「特別」な存在であるといえる。

ただ、同時に人には共通性があり、それゆえに喜びや悲しさを共有し、また協働することができる。これも多様な人が同じ社会で生きていくためには、とても大切な点となる。その意味では、人は「特別」ではないともいえる。ただ、私たちはなにかと他者との違いを見出そうとしたり、一方で他者と同じと考えてしまったりする。本当は個性と共通性のとらえ方のバランスをとることができればいいのだが、私たちはとするとどちらかに偏りがちである。

なぜこのような話をするのかというと、実は以前、障害のある当事者の以下のような発言を聞いたからである。

「健常者は、障害者のつらさを十分に理解していない。ただ、それと同じか、またそれ以上に、障害者の生活における豊かな楽しさ、喜び、そして幸せのリアリティをわかっていない。」

確かに、本書も含めた専門職の養成テキストは、障害のある人が心身に、そして生活にいかにより多くの困難を抱えているかといった説明に終始する傾向にある。そのため、生活における生きづらさに焦点を当てるあまり、障害のある人の生活における豊かさを伝えることができていないと感じる。それでは、障害のある人の生活のリアリティの理解にはつながらない。

そして、そのようなどちらかに偏った理解は、その人の本当の姿を見失う。ソーシャルワーカーであれ、地域をともにする隣人であれ、障害のある人への理解とそれに伴う関わりを歪めてしまう。そのため、人の多様性の一つとして「障害」をとらえつつ、本書の幅広い項目を理解してほしい。そしてそれをもとに、個別性のある障害がある A さんや B さんについての理解を深めてほしい。本当は、A さんや B さんと24時間365日、そして一生を共にすれば、かれらのことがよくわかる。ただ、私たちの時間はそれぞれに有限で、A さんだけの支援を、それも一生するわけにはいかない。そのために、本書で学ぶ知識やスキルを補助線にして、その人を理解する方法をとらざるをえない。その人の適切な理解に少しでも早く近づくための方法として、本書での学びがある。是非そんなことも考えながら、本巻を読み進めてほしい。

2025年3月

編著者 與那嶺司

注

(1) 新村出編 (2018)『広辞苑 第7版』岩波書店, 2089.